

## 第9章 戦士

すでに見たように、不死身のトロイア戦士キュクノスは、アキツレウスとの戦いに敗れて白鳥に変身した。白鳥となったあともキュクノスが不屈の闘志を持ち続けたとは想像しにくい。鳥になっても人間のときと変わらぬ戦意が生き続けた物語もいくつか知られている。

## 1 ダイダリオーン

ケーユクスの死を嘆き悲しんだアルキユオネーの物語はすでに紹介したが、ケーユクス自身も生前に彼の兄弟を失って悲しみにくれたことがあった。オウイディウスによれば、ケーユクスが王として治めるトラークイスへ、そのときたまたま保護を求めてやってきたペーレウスとその従者らに、

おそらく、この鳥、略奪の暮らしを送り、あらゆる鳥を震え上がらせる鳥はつねに翼を有している  
たとあなたがたはお思いかもしれませんが、かつては一人の勇士でした。たいへんな不動心を備え

るために、そのときすでに気合い鋭く勇猛に戦い腕力で事を決するたちでした。名前はダイダリオン、彼をもうけた父はアウローラを呼び出し、天空を最後に立ち去る星です。私が心を配るのは平和であり、私の心配りは平和の維持と結婚に向けられました。兄は野蛮な戦争を好みました。彼の武勇はかつて諸国の王侯を征服し、姿を変えたいまはティスベ<sup>1</sup>の鳩たちを追い回しています。

す。

〔変身物語〕一一・二九—三〇〇〕

とケーユクスは語り始め、自分の兄が鷹に変身した次第を披露する。

ダイダリオンにはキオネーという娘があり、年頃になると千人もの求婚者が押し寄せるほどの美貌を誇っていた。この娘をアポッロン神とメルクリウス（ヘルメース）神が同時に目にして、同時に熱を上げることとなった。メルクリウスがすぐに自分の杖で触れて彼女を眠らせたうえで思いを遂げた一方で、アポッロンは夜まで待つてから老婆に化けて喜びを味わった。その結果、月が満ちてキオネーは双子を産んだ。メルクリウスの種からは、アウトリュコスといって、黒のものでも白、白のものでも黒としてしまうような策略に長けた息子が、また、アポッロンの種からは、ピランモンという、歌と豎琴に名高い息子が生まれた。しかし、双子を産んだことでキオネーはディアーナ女神を見下し、女神の器量にけちをつけたので、女神は激しく怒り、すぐさま弓矢で彼女の罪深い舌を射抜いた。舌が喋ろうとしてもはや言葉が出なくなつたのと一緒にキオネーは命を落とした。父ダイダリオンの悲しみは深く、ケーユクスがかかる慰めも耳に入らなかつた。

彼女が茶毘に付されるのを見たとき、彼は衝動に駆られて四度も火葬の薪積みへ飛び込もうとしました。しかし、四度も押し戻されると、憑かれたように一散に駆け出し、あたかも牡牛がスズ

メバチに首筋を刺されたときのようになり、道もないところを突つ走ります。そのときの走り方はもはや人間のものとは私には見えませんでした。足に翼が生えたとおなたも思ったことでしょう。ですから、彼は誰にも追いつかれず、死を望む一心で急ぎ、バルナツンスの山頂に到達します。しかし、アポローン神が憐れみを垂れ、ダイダリオーンが高い岩場から身を投げたとき、彼を鳥に変えました。急に生えた翼で宙に浮かせると、口を屈曲させ、爪に曲がつた鉤先を与えたうえで、武勇は昔のまま、力は体に比して大きなものとなりました。彼はいま鷹となつて、いかなる相手とも仲良くせず、あらゆる鳥に対して非情な仕打ちをします。自身の痛みが他者に痛みを与える原因となつてゐるのです。

(同一一・三三三—三四五)

自分の器量と子供についての度を越した自慢が災いを招くという話でよく知られているのは、ニオペーの物語であろう。プリュギアの女王であつた彼女の場合、レートー女神を蔑ろにしたことから、女神の子である兄妹神アポローンとディアーナによつて、息子らと娘らすべてを矢で射殺されてしまつた。悲しみのあまり、ニオペーは体が固まつて石と化し、石になつても涙を流し続けたという。ここでは、自慢したキオネー当人がディアーナによつて殺される一方で、子を失つた親の悲しみをアポローンが憐れむ展開を見せている。そうした救いを受けても、まるで八つ当たりをするように誰にでも戦いを仕掛け続けるというのだから、ダイダリオーンは根っからの戦士なのである。

## 2 鶴とピュグマイオイ

ホメーロス『イーリアス』第三歌の冒頭、ギリシアとトロイア両軍の陣立てが整い、これから戦いが

始まろうとする場面は、次のような比喩で表現される。

それはまさしく鶴たちの叫びが大空いっぱいに轟くよう。鶴たちはいまや、冬の嵐と凄まじい雨を逃れたのち、叫びを上げて大洋の流れへと飛んでゆく。ピュグマイオイイ人に流血と死をもたらそうとして、朝まだ早くに忌まわしい争いを仕掛ける。

〔イーリアス〕三・三二七

世界を二分しての大戦争、その戦闘の火ぶたが切って落とされるところが喩えられるのだから、この鶴たちというのはよほどの戦好きか、あるいは、よほどの憤激ないし憎悪をピュグマイオイイ（アフリカの伝説的な小人族）に対して抱いていたに違いないと想像されるが、鶴を戦士にした謂れを語る物語はポイオス『鳥類譜』第二巻にあったとされ、その梗概が次のように伝えられている。

ピュグマイオイイと呼ばれる人々のところにオイノエーという娘が生まれた。器量は申し分なかったが、気性は邪険で高慢であり、アルテミス女神とヘーラー女神のことを少しも大切に思わなかった。彼女はニーコダマスという市民の中でも節度と適正を心得る人物に嫁ぎ、モプソスという息子をもうけた。すると、ピュグマイオイイは誰もが親切を尊んだので、非常にたくさんのお贈り物を子供の誕生祝いにもつてきてくれた。しかし、ヘーラーはオイノエーが自分を崇めないことを咎めて、彼女を鶴に変えてしまった。首を長く引き伸ばしたうえ、空高く飛ぶ鳥となるようにし、彼女とピュグマイオイイのあいだに戦争を引き起こした。オイノエーが息子モプソスへの恋しさから家のまわりを飛んで離れようとせずにいると、ピュグマイオイイは全員が武装して彼女を追いかけた。このた

めに、いまでもピュグマイオイと鶴のあいだには戦争が続いている。

(アントーニヌス・リーペラーリス『変身物語集』一六)

子を思う気持ちが親を戦士にしたことはダイダリオンの場合と同じだが、こちらのほうには戦いに大義があると言えるかもしれない。ただ、故国の人々といつまでも戦い続けるというのは悲惨と言うしかない。ちなみに、鶴に変身した母親の名前をアテーナイオス(「食卓の賢人たち」九・三九三e-f)はオイノエーではなく、ゲラナ(gerana)としている。「鶴」を意味するギリシア語がゲラノス(geranos)であるから、こちらは鶴の縁起譚の性格をもつことになる。

さて、この物語はたいへん広く知られていた。そのためか、オウイデウスによれば、技芸の女神ミネルウアは、機織り上手の娘アラクネーから機織り競べの挑戦を受けたとき、娘に対して神への挑戦は罰で報いられるという先例を織物の四隅に織り込んだが、その一つにこの物語があつたという。

もう一隅にはピュグマイオイの母の憐れな運命がある。彼女はユーノー女神との争いに敗れたため、女神に命じられて鶴となり、自国の民に戦争を宣言した。(『変身物語』六・九〇―九二)

傲慢な挑戦が自分の身に災いを招くという例証だが、この例証を織り込んだ女神の織物がアラクネーの織物を打ち負かすことにはならなかった。その次第については、あとに譲ることとしよう。<sup>3)</sup>

### 3 メムノニデス(メムノーンの鳥)

ギリシアの旅行家パウサニアスは次のような記事を残している。

メムノニアスという名前の鳥がいる。この鳥たちは、ヘッレスポントス<sup>4</sup>の人々の話では、毎年決まった数日間、メムノーンの墓所へやってくる。そこをかすめて飛び、アイセーポス川の水で翼を濡らして湿らす。

〔ギリシア案内記〕一〇・三一・六

メムノーンは、曙の女神アウローラの息子でエチオピア王であったが、アウローラの夫ティートーノスがトロイア王プリアモスと兄弟であったことから、トロイア戦争においてトロイア方に加勢して戦った。王はしかし、アキッレウスの槍によって倒され、トロイアに葬られた。パウサニアスの記事では「戦士」という性格は現れていないが、プリーニウスは、

ある人々が主張するところでは、毎年イーリオンに向かってエチオピアから飛び立つ鳥があり、これらはメムノーンの墓のところでぶつかり合つて戦うということで、そのためにメムノニアスと呼ばれる。これと同じことをこの鳥たちは五年目ごと「四年おき」にエチオピアにあるメムノーンの王宮のまわりで行う、とクレムーティウスは自分の発見として伝えている。

〔博物誌〕一〇・七四

と記している。このようなメムノニアスの戦いの儀式は、オウイディウスによれば、この鳥たちが誕生したときからのものである。メムノーンが戦死して遺体が荼毘に付されたとき、母なる女神アウローラはユッピテル神に懇願して、息子のために荣誉が与えられるように求めた。

ユッピテルが承知すると、メムノーンの高く組み上げた火葬の薪積みが高く燃え上がった炎によつて崩れ落ち、黒い煙が渦巻きながら陽光を遮つた。それはあたかも、川面から生じた霧が立ちの

ぼると、その下には日差しが届かないときのよう。そして、空を舞っていた黒い灰が一つに寄り集まって輪郭をくつきりさせ、形を現すと、炎から温もりと生命力を得た。翼は炎の軽さそのものから得られ、最初は鳥に似ていただけのものがすぐに本物の鳥となって翼の羽ばたきを響かせた。並んで羽ばたいた姉妹の鳥たちの数は計り知れず、それらの誕生起源はみな同じであった。彼女らは三度火葬の薪積みのまわりを旋回し、一斉に翼で胸打つ音を三度空へ響かせると、四度目の旋回で隊列を分割した。それから、二つの部隊に分かれた鳥たちは戦士となって勇猛に戦争を行う。怒りにまかせて嘴と鉤爪を動かし、翼と胸をぶつけ合って消耗すると、落下して同族である自身の体を葬られた灰への供物とした。自分たちが勇敢な英雄から生まれたことを忘れなかつたのである。にわかには生まれた鳥たちの名前は生みの親にちなんでMEMNONIDESとつけられ、太陽が十二の星座宮をめぐること、親と同じような雄叫びを上げて戦いを繰り返し、命を落とす。

〔変身物語〕一三・六〇〇—六一九

屁理屈を言うと、MEMNONの灰から誕生したMEMNONIDESが、その灰への供物となるために互いに戦って命を落としたとすれば、この鳥たちはすべてその場で死に絶えたと考えられる。そうすると、戦いの儀式が毎年繰り返されるためには、MEMNONの墓所で火葬も毎年繰り返して空に灰を舞い上げさせねばならないという奇妙なことになってしまう。しかし、これはやはり屁理屈というものであろう。

ついでながら、必ずしも戦士の性格を持ち続けてはいないが、MEMNONIDESのように英雄の墓所を参拝する鳥として、DEIOMEDIAE（DEIOMEDIASの鳥）という鳥がある。プリーニウスによると、嘴と目が炎のような赤、ほかは白く、嘴で掘った穴に枝を敷き、土で覆って営巣する習性があるといひ、

これらが見られるのは世界中でただ一箇所、アーブリアの沖にあるディオメーデースの墓所で有名な島だという。

これらは異国の者が来ると叫びを上げて敵意を示すが、ギリシア人だけに愛想よくするという、驚くような区別をする。まるでディオメーデースの種族に敬意を表するかのようだ。そして、その神殿で毎日、喉いっばいに含んだ水と濡れた翼できれいに清めを行う。このことから、ディオメーデースの仲間がこれらの鳥に変身したという話が作られた。

〔博物誌〕一〇・二二六

英雄ディオメーデースは、オデュッセウスとともにトロイアの命運を握るパッラス神像を盗み出すなど数々の戦功を上げたが、トロイア陥落後の帰還の際には、他の英雄たちと同様、苦難を味わい、結局、イタリア南部、東岸のアーブリア地方に落ち着いた。その苦難の一つとして彼の仲間が鳥に変身した次第は、ウエルギリウス〔「アエネイス」一・二七―二七四〕によってもオウイデイウス〔「変身物語」一四・四八三―五〇九〕によっても語られている。ウエヌス女神の怒りがなせる業であったので、イタリアに着いたディオメーデースは、この悲劇を教訓として、対アエネアースの戦争を遂行中のトゥルヌスから加勢を頼まれたとき、これを断った。とすると、メモノニデスとは対照的に、ディオメーデアエはディオメーデースの平和主義をたたえているのかもしれない。

〔注〕

(一) ティスベーは、「野鳩の多く棲む」(ホメーロス『イリアス』二・五〇二)と言われるポイオーティアの町。

- (2) ちなみに、アウトリユコスの娘アンテイクレイアは、シーシユボスに操を奪われてからラーエルテースに嫁ぎ、オデユッセウスを産んだという。
- (3) 第II部第3章第2節「エクプラシス」の5「アラクネーとミネルウアのタペストリー」参照。
- (4) ヘッレースポントスは現在のダーダネルス海峡で、トロイアのすぐ北に位置する。